ねぇ、お坊さん教えてよ

# どうして お葬式をするの？

浄土真宗本願寺派総合研究所　岡崎秀麿・冨島信海

# はじめに　――本書に込めた願い――

浄土真宗本願寺派総合研究所
**所長　丘山　願海**

浄土真宗本願寺派総合研究所では、平成23（2011）年より葬送儀礼研究を開始した。現在は、宗派が掲げる「宗務の基本方針及び具体策」において掲げられている「「念仏者の生き方」に学び、行動する」という基本方針に従い、「宗教的感動を共有できる法要や葬送儀礼を確立し、普及を図る」という事業を立ち上げ、研究活動に取り組んでいる。

なぜ葬送儀礼研究が必要なのかについて、浄土真宗本願寺派総合研究所ブックレット№22　教学シンポジウム記録・親鸞聖人の世界（第5回）『現代における宗教の役割―葬儀の向こうにあるもの―』（本願寺出版社、2012）から２つの言葉を引用することで答えたい。

> 近年、書籍・雑誌を中心として「葬儀」をめぐる議論が活発になっています。現在では葬儀に対する意識が大きく変わり、葬儀の規模や形式をはじめ、葬儀そのものの要・不要さえも問題とされるようになってきました。　（３頁）

> 人びとの要請を受けて葬儀を執り行ってきた僧侶は、今では全く反対に、人びとから「何故、葬儀に僧侶が必要なのか?」という問いを向けられているのです。こうした現状において、僧侶が今後も葬儀における一定の役割を担おうとするならば、人びとから発せられている問いに、明確かつ納得のいく応答をしていく必要があるように思います。　（169頁）

養老孟司氏が「人間の致死率は100パーセント」（『死の壁』新潮社、2004）と述べたように、人はいつか死ななければならない。そして、人が死ねば誰もが「葬られてきた」。

> 葬儀は、故人にとっても遺族にとっても、それぞれ、人間が人間であることの証し。　（『宗報』2010年６月号巻頭言、満井秀城著）



だったはずである。しかしながら、人口減少、超高齢社会といった人口動態の変化と人びとの生活スタイルの変化、「多死社会」とも評される「死」の急激な増加と「死」の変容などが原因となり、人びとの価値観・死生観は大きく変わってきた。それによって、「なぜ葬儀をやらなければならないのか」「葬儀は費用がかかりすぎではないか」「伝統や慣習にしばられた葬儀ではなく自分らしい葬儀がしたい」などといった葬送儀礼への批判や疑問が噴出するようになった。

こうした批判や疑問に「応え／答え」ていく必要がある。これが当研究所の葬送儀礼研究の大きな動機であり、これは2011年の研究開始以来、変わらない姿勢である。

そこで本書では、さまざまな書籍、もしくは葬儀社さんのウェブサイトなどに記載されていた問いの中でも頻出度の高い問いに、「これまでは聞かれることもなかった／考えられることもなかった」ような「死んだらどうなるのか」「葬儀はなぜ行うのか」という問いを加えて取り上げ、一問一答の形式で掲載し、葬儀やお墓に関する一般の人びとの「問い」を、「そんなこと当たり前」だとは言わずに、ともに考えていくことを主眼としている。

期せずして本書が発刊される前年の令和２（2020）年10月に、浄土真宗本願寺派第25代門主の大谷光淳さまが、一問一答の形式で仏教の教えを示された『令和版　仏の教え　阿弥陀さまにおまかせして生きる』（幻冬舎）を発刊された。

その初め、「お伝えしたいこと～序文にかえて」に、

> 新型コロナウイルス拡大という困難な状況の中で本書が発刊されます。それが、私たち僧侶自身にとっても、そして、現代に生きる一人ひとりの方にとっても、み教えに触れる機会になり、すべての人々が心豊かに共に生きることのできる社会の実現の機縁となりますことを心から願っています。　（７頁）

と記されている。本書が求めること、本書を執筆した２人の研究員の思いは、これと変わるところがない。

ねぇ、お坊さん教えてよ　どうしてお葬式をするの？　もくじ

◆はじめに 2　◆本書の活用法 6　◆本書の構成 7

## Chapter 1 「葬儀」へのギモン①

Q.01 お葬式はなんのためにするのですか？ 10
Q.02 お葬式にお坊さんがいないとだめですか？ 15
Q.03 お葬式にお坊さんをたくさん呼ぶと、仏教的にいいことがありますか？ 20
Q.04 友人に浄土真宗以外のお坊さんがいます。彼にお葬式を頼んでも良いですか？ 24
Q.05 頼めば、故人が好きだったお経を読んでもらえますか？ 29
Q.06 「ナーマンダー」と聞こえます。「なもあみだぶつ」じゃないの？ 34
Q.07 通夜と葬儀、どちらか片方でいいですか？そもそも何が違うんですか？ 39
Q.08 家族だけでお葬式をしても良いですか？ 43

コラム
親鸞聖人と「死」 13 ／「自分らしい葬儀」「迷惑をかけない葬儀」 18 ／蓮如上人と『正信偈和讃』 22／檀家ってなに？ 27／お経が日本に届くまで 32／親鸞聖人に会える!? ―現代に伝わる文字と言葉― 37 ／お釈迦さまのお通夜 42 ／葬儀の変化 46

## Chapter 2 「葬儀」へのギモン②

Q.01 お寺への支払いは、いつするのですか？ 50
Q.02 きょうだいが3人いますが、父の葬儀の費用は、誰が負担すればいいですか？ やっぱり、喪主の私ですか？ 55
Q.03 必要最低限の経費の葬儀は？ 60
Q.04 家族が死んだら、おめでたい席に出てはいけないと言われました。なぜですか？ 65
Q.05 どこまでの家族が死んだとき、いつまで喪に服すのですか？ 69
Q.06 他宗派のお葬式に参列するときに、どうすれば良いか教えてください。 74
Q.07 法名（戒名）は長い方が、死んだ人のためになるのですか？ 78
Q.08 死装束には、何の意味がありますか？ 82

コラム
お布施もキャッシュレス!? 53 ／祭壇・霊柩車の変遷 58 ／終活？ 63 ／けがれ・ケガレ・穢れ 67 ／「家族」も「先祖」も変わる!? 71 ／会葬の心得 77 ／「戒」と「律」 81 ／経帷子は使わない 85

## Chapter 3 「法事」へのギモン

Q.01 お葬式から帰って塩を撒くのはなぜですか？ 88
Q.02 初七日なのにお葬式のときにするのはなぜですか？ 93
Q.03 お盆の時期の直前に亡くなった場合、初盆はつとめるのですか？ 97
Q.04 3年前に亡くなった祖父とはあまり仲が良くありませんでした。法事をしなければなりませんか？ 102
Q.05 法事は寺院でもできますか？ 107
Q.06 法事は何回忌までやればいいですか？ 111
Q.07 来年、父の二十五回忌をつとめます。自分のときには、二十五回忌までつとめてもらえるか心配です。 115

コラム
迷信はすべてダメ？ 91 ／亡くなった後、彷徨う!? 96 ／お盆の由来 101 ／法事にも地域差が!? 105 ／お寺の活用 110 ／「報恩講」のお斎 114 ／世々生々の父母・兄弟なり 118

◆仏典のことば（略解説） 120　◆参考文献 128
◆《附録》これでわかる！ 浄土真宗の葬送儀礼 132　◆おわりに 136

## ◆ 本書の活用法

本書の中心は、「問いと答え」です。その「問い」には、「さまざまな書籍やホームページから収集した問いの中でも頻出度の高い質問」を中心として、「一般の方が抱く問い」「僧侶でなければ答えられない問い」を入れました。「問い」を見ていただくと、「お坊さん」に質問しにくいと考えられる内容も入っています。例えば、「離檀料」の質問や「法事をいつまで続けていいのか」といった問いです。こうした問いを中心にしたのは、「お坊さんに聞きたいけど、直接聞きにくい」といった問いに答えること、つまり、一般の方々が、「本当はお坊さんに聞きたいと思っているけど聞きづらいから、葬儀社さんや一般書籍で確認している」ことにできるだけ答えることを目的にしたからです。

ですから、本書を手に取っていただいた方には、まず、本書での問いと答えで納得できるのか。あるいは、私ならこんなことが聞いてみたい。実は今こんな悩みがある。こういったことを考え、ご自身やご家族、ご親族の葬儀やお墓、仏事のことについて話し合う機会にしていただきたいと思います。そして、可能であれば、そうした機会にお坊さんも関わることができればと願っています。

僧侶の方であれば、本書におさめられた問いと答えを見られて、答え方がご自身の立場と異なっていたり、答えが十分ではないとお考えの方も多いかもしれません。しかし、本書はあくまでも１つの応答の形を示し、一般の方と僧侶の方がともによりよき答えに至りつける場が整うことを願って執筆しています。その点をご理解いただき、ぜひ、普段の寺院活動や各種研修会などでもご活用いただければと思っています。そうした際、さまざまな話し合いが行われるよう論点や関連する問題点を挙げた「一緒に考えてみましょう」、



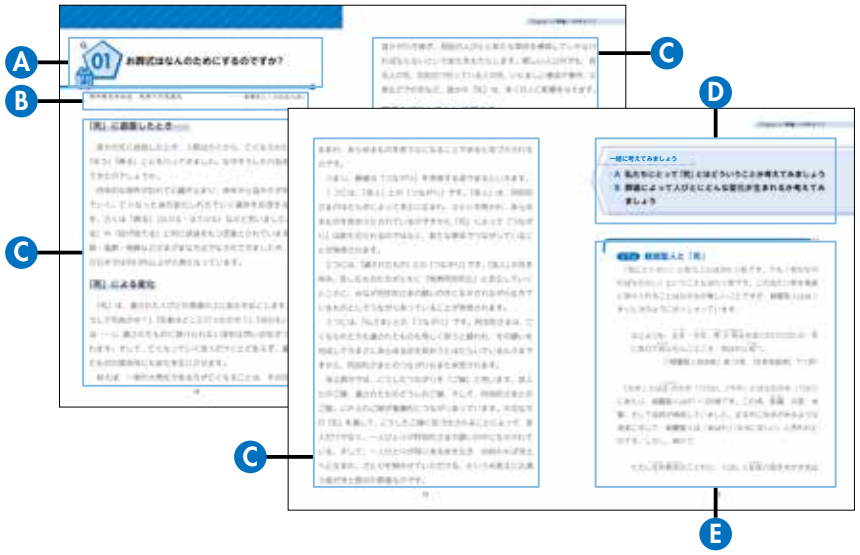
本文で詳述できなかったさまざまなテーマを紹介した「コラム」もご活用いただければと思います。

## ◆ 本書の構成

### 1. 問いとその答え

さまざまな書籍やウェブサイトには、「死」や「葬儀」「墓」「仏壇」などについての質問が数多く挙げられています。本書では、「頻出度の高い問い」「一般の方が抱く問い」「僧侶でなければ答えられない問い」を挙げています。それぞれ数頁で完結しており、どの問いからお読みいただいても構いませんし、どの部分を切り取って活用していただいても構いません。

Ⓐ 質問事項　Ⓑ 仏典のことば　Ⓒ 質問への答え
Ⓓ 一緒に考えてみましょう　Ⓔ コラム



### 2.「仏典のことば（略解説）」

各問いの直下に掲げた「仏典のことば」の概略や、それぞれのことばの意味について簡単に示したものです。「仏典のことば」にご興味をお持ちの方は、ぜひご参照ください。

### 3. 参考文献

本書を執筆するにあたって参照した書籍・論文や、入門的な書籍などをピックアップしました。

### 4.「これでわかる！ 浄土真宗の葬送儀礼」

浄土真宗本願寺派における葬儀の歴史や意義について簡潔に記載しています。あくまで基本的な点だけですので、より詳細な解説については参考文献にあげている書籍をご確認いただきたいと思います。

*なお、別巻『死んだらどうなるの?』の附録には「私の相談ノート」を掲載しています。どのようなことを「遺していく人」に伝えたいか。そして、「伝えたいこと」が「きちんと伝えたい人に伝えてもらえる」ようにしていくことを目的としています。併せてご活用下さい。

**【本書で用いた略称について】**

・浄土真宗の葬送儀礼は、仏教の教え、親鸞聖人の教えなどに基づいて行われるものですから、仏典のことばに依るところも多くあります。本文には、しばしば仏典のことばを引用し、また「仏典のことば」に親しんでいただくために、「問い」の直下に関連のある文を掲載し、巻末にはそれぞれの略解説を附しています。

・本文中の引用文および「仏典のことば」は、主として本願寺出版社の『浄土真宗聖典（註釈版第２版）』及び『浄土真宗聖典（註釈版七祖篇）』を使用し、次のような略称で出典を示しています。

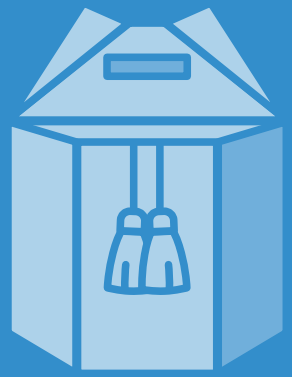
『浄土真宗聖典（註釈版第２版）』→『註釈版聖典』
『浄土真宗聖典（註釈版七祖篇）』→『註釈版七祖篇』

※その他の出典については、「仏典のことば（略解説）」をご参照ください。



Chapter 1

# 「葬儀」へのギモン①



# Q.01 お葬式はなんのためにするのですか？

帰命無量寿如来　南無不可思議光　―― 親鸞聖人「正信念仏偈」

## 「死」に直面したとき……

誰かの死に直面したとき、人間は古くから、亡くなられた方を「弔う」「葬る」ことを行ってきました。なぜそうした行為を行ってきたのでしょうか。

肉体的な限界が訪れて心臓が止まり、身体から温かさが失われていく。亡くなった後の変化し朽ちていく遺体を処理することを、古くは「葬る」（はぶる・ほうぶる）などと言いました。「放る」や「投げ捨てる」と同じ語源をもつ言葉とされています。土葬・風葬・鳥葬などさまざまな方法でなされてきましたが、現在の日本では99.9%以上が火葬となっています。

## 「死」による変化

「死」は、遺された人びとの意識の上に変化を起こします。「どうして死ぬのか？」「死者はどこに行ったのか？」「自分もいつかは……」。遺されたものに避けられない深刻な問いが突きつけられます。そして、亡くなっていく故人だけにとどまらず、遺されたものの関係性にも変化を生じさせます。

例えば、一家の大黒柱である方が亡くなることは、その役割を



誰かが引き継ぎ、周囲の人びとと新たな関係を構築していかなければならないという変化をもたらします。親しい人以外でも、有名人の死、名前だけ知っている人の死、いたましい事故や事件、災害などでの死など、誰かの「死」は、多くの人に影響を与えます。

## 葬儀をプロセスとして捉える

「死」におののき、「死」を悼み、「死」を恐れ、「死」を悲しみ、「死」から「生」を省みる。さまざまな変化をもたらす「死」という厳粛な事実に向きあう場が「葬儀」です。

だからこそ「葬儀」は、一回、数時間で終わるものではなく、臨終から始まる儀礼の一連のプロセスとして理解する必要があります。浄土真宗においては、臨終以降、火葬、収骨、還骨に至るまでの全体を指して「葬儀」と考えています［参照→附録「これでわかる！浄土真宗の葬送儀礼」］。

## 葬儀はご縁が結ばれる場

葬儀は、「先立たれた方」（故人）とご縁ある「遺されたもの」（ご遺族やご参列の方々）が集まって、ともに「死」を悼み、悲しむ中で行われます。葬儀では、故人を偲びつつ故人のさまざまなことが語られながら、儀礼が執り行われます。そのことを通して、一人ひとりが「故人の死」という事実、そして、一人ひとりの命もまた限りあるものであるという事実に向きあってきたのです。そうした中で、悲しみ、苦しみから私たちを救おうとする阿弥陀（あみだ）さまの願いに出遇（であ）い、「死」は終わりではなく、阿弥陀さまの浄土に

生まれ、あらゆるものを救う仏に成ることであると気づかされるのです。

つまり、葬儀は「つながり」を実感する場であるといえます。

１つには、「故人」との「つながり」です。「故人」は、阿弥陀さまのはたらきによって浄土に生まれ、さとりを開かれ、あらゆるものを救おうとされているのですから、「死」によって「つながり」は断ち切られるのではなく、新たな関係でつながっていることが実感されます。

２つには、「遺されたもの」との「つながり」です。「故人」の死を悼み、悲しむものたちがともに「南無阿弥陀仏」と念仏していくところに、みなが阿弥陀さまの願いの中に生かされながら生きているものとしてつながりあっていることが実感されます。

３つには、「仏さま」との「つながり」です。阿弥陀さまは、亡くなられた方も遺されたものも等しく救うと願われ、その願いを完成して今まさにあらゆる命を救おうとはたらいている仏さまですから、阿弥陀さまとのつながりもまた実感されます。

浄土真宗では、こうしたつながりを「ご縁」と言います。故人とのご縁、遺されたものどうしのご縁、そして、阿弥陀さまとのご縁。これらのご縁が重層的につながりあっています。大切な方の「死」を通して、こうしたご縁に気づかされることによって、故人だけでなく、一人ひとりが阿弥陀さまの願いの中に生かされている、そして、一人ひとりが限りある命を生き、命終われば浄土へと生まれ、さとりを開かせていただける、というみ教えに出遇う場が浄土真宗の葬儀なのです。





**一緒に考えてみましょう**

- **A 私たちにとって「死」とはどういうことか考えてみましょう**
- **B 葬儀によって人びとにどんな変化が生まれるか考えてみましょう**

## コラム 親鸞聖人と「死」

「死にたくない」と思うことは当たり前です。でも「死ななければならない」ということも当たり前です。この当たり前を素直に受け入れることはなかなか難しいことですが、親鸞聖人ははっきりと次のようにおっしゃっています。

> なによりも、去年・今年、老少男女おほくのひとびとの、死にあひて候ふらんことこそ、あはれに候へ。
>
> （『親鸞聖人御消息』第16通、『註釈版聖典』771頁）

「去年」とは正元元年（1259）、「今年」とは文応元年（1260）にあたり、親鸞聖人は87～88歳です。この頃、飢饉、災害、地震、そして疫病が頻発していました。至る所に死体があるような現実に対して、親鸞聖人は「あはれ」（本当に悲しい）と言われたのです。しかし、続けて、

> ただし生死無常のことわり、くはしく如来の説きおかせおは